研究題目：

ラオス北部サム川流域地域における織物の技術伝承とその変容

総合研究大学院大学　文化科学研究科　比較文化学専攻
伊藤　渚（博士後期課程）

◆研究の目的：本研究は、ラオス北東部フアパン県サム川流域地域に所在するタイ系諸民族の村で長期の定着調査を行い、戦争、社会主義革命、市場化・国際化といった歴史的経験の中で、織物の技術伝承がどのように維持され、また変化しているのかを、人、モノ、その製作技法を、それらが存在する文脈から切り離さずに体系的に調査･研究して明らかにしようとするものである。本発表では、昨年度の調査の成果として、織物が当該社会の社会的文脈といかに関わりあう活動であるかを示したい。

◆調査地と調査対象：本研究の調査地はフアパン県サムヌア郡とサムタイ郡を通りベトナムへと流れるサム川及びサム川支流流域の「仏教徒ラオ」を自称するタイ系諸民族の村である。サム川流域のサムヌア及びサムタイ地方はともに、織物の盛んな地域として知られている。村の生活における男女の分業は明確であり、その中で織物は女性の仕事である。ゆえに、本研究の対象は、そこで織物活動に関わる女性とその家族である。国内外の言説のとおり、サム川流域は織物が盛んで、村の女性のほとんどが織物に関わっている。しかし、彼らは、織物は「職業」ではないという。実際、女性たちは、織物の他に、農業や採取活動、家事、育児など、様々な活動に従事している。つまり、同地において、織物は、農業や家事と同じく、女性であれば誰もが行うごく当たり前の仕事のひとつとして行われており、特別な技能ではない。女性であれば誰もが行う日常の仕事だという点がサム川流域の織物活動の特徴である。

◆結婚：村人の人生において結婚は村の正式なメンバーとして認められるための最も重要なイベントである。なぜなら、結婚は村生活における最も基本の単位であり核である同居家族を形成するからである。同居家族とは同じ家に住み、米を栽培・消費する集団である。というのも、日常生活の中で米を共食するのは基本的に同じ家に住む家族だけだからである。

　サム川流域地域では、夫方居住婚が一般的である。田畑や家畜などの財産は息子に均等配分される。対して、娘は結婚して他家に嫁ぐものだと考えられているので、基本的に財産を分与されない。結婚すれば、娘は生家を出て婚家の一員となったとみなされ、祖先祭祀も夫の親族とともに夫の家の祖先祭祀を行うことになる。また、死後は、夫の家の方式の喪葬儀礼で送られ墓所に夫と並んで埋葬される。

◆織物と結婚：同地では「女性は織物ができないと結婚できない」という言説が依然として一般的であり、織物は女性の価値を高め、結婚するためには欠かせない能力として語られる。実際、村では、織物の習得と結婚は直接結びついている。結婚に際し、新婦は持参財として自身の織った布を夫の親族に贈る習慣がある。また、新婦は嫁入り道具

として両親が用意した織道具一式を持参する。これらの習慣は、その一部が簡略化されつつ現在も続いている。結婚は村の生活において必須なのであり、村のすべての女性が織物経験を持つ理由の一つは織物が結婚と結びつく活動だからだといえる。

◆ブン（祭祀）：調査地では、儀礼や祭祀を行うことを「ヘット・ブン（ブンを行う）」という。「ブン」では、家畜が殺され、その肉が米や酒とともに振る舞われる。その前後に各種の儀礼が伴うことも多いが、料理や米、酒の振舞いの無い「ブン」は考えられない。来客である親族に食事や酒を振る舞い共に語り歌い踊り楽しむ「ブン」は、儀礼に付属する宴会というだけではなく、普段は同居家族のみが共食する米を、村内や同一地区内に住む親族に振舞い共食する機会である。本発表では、今回調査で遭遇し得た儀礼・祭祀のうち２つの事例を紹介する。

＊ 事例１「くじ飯供養祭（ブン・ホー・カオ・サ・ラーク）」：　ラオスの仏教徒は、雨安居（パンサー）期間中に、2 つのブンを行う。旧暦 9 月黒月 14 日に行う飾地飯供養祭（ブン・カオ・パダップ・ディン）と、旧暦 10 月白月 15 日に行うくじ飯供養祭（ブン・ホー・カオ・サ・ラーク）である。この二つのブンの共通点は、家（フアン）に帰ってくる祖先の魂（ピー）を迎えるという点にある。本事例では、くじ飯供養祭の実施が同居家族単位で行われ、夫婦が実施の責任を分かち合っていることを示す。

＊ 事例２「治療儀礼（ブン・ヘット・セン）」：サムタイ郡ムアン・グアン村のカムトーン家では、長男の体調がなかなかよくならないので、モー・モー（治療儀礼師）に見てもらったところ、妻と別々に葬られていたカムトーン氏の父であり、病人である長男の祖父のピー（霊）が原因だと判じられたのだ。そこで、カムトーン家では、モー・セン（治療儀礼師）を呼んで、儀礼を行い、祖父のピー（霊）を祖母の眠る埋葬地へ呼び寄せることにした。この事例は、夫婦が、死してなお共にあるべき 2 人で 1 組の存在とみなされていることを示唆している。

これらの事例は、村の生活において、結婚がいかに重視されているか、また、結婚によって形成される夫婦が 2 人で 1 組の分かちがたい共にあるべき存在だとみなされているかを示唆するものである。そして、結婚によって形成される同居家族は、これら 2 つの事例のような祭祀の実施を共同実施する責任を分かち持つ共同体なのである。

◆まとめ：村の生活において結婚は村生活の基本単位である同居家族を形成する重要なステップである。同居家族とは同じ家に住み、米を栽培・消費する集団である。言い換えれば、家や米が家族という集団に具体的輪郭を与えているといえる。そして、織物が、結婚と直接結び付けられているという事実は、織物もまた、家や米と同じく、「家族」に具体的な輪郭を与える重要な要素のひとつであることを示唆している。だからこそ、サム川流域地域のタイ系民族の村では、女性であれば誰もが行う日常の仕事として織物が行われているのだと考えられる。